

エカテリンゴフ園遊パノラマ論考

—— K. ガンペリンの絵巻図(1824-1825)に対するコメントリイを通して ——

The Panorama of the Public Fair *Gulyanie* at Ekateringof :
An Explication to K.K.Gampel'n's Picture Scroll (1824-1825)

坂内 徳明

BANNAI Tokuaki

I.

革命前ロシアの帝都サンクト・ペテルブルクでは、18世紀から20世紀初頭まで、市内の広場や通りのみならず郊外の多くの場所で、謝肉祭（マースレニツァ）、復活祭、クリスマス週間などに、グリヤーニエ、あるいは、ナロードノエ・グリヤーニエと呼ばれる祝祭が行われていた。それは、貴族のみならず一般市民が群れ集まる一大ページェントとして革命前ペテルブルクの生活にとって欠かせぬ娯楽となっていた¹。革命後、このグリヤーニエはソビエト体制維持を祝う国家的祭典に組み込まれる一方で、市民の「健康的な」娯楽と散策の場へ変貌したが、それでも、グリヤーニエという言葉は確実に記憶され、ソビエト体制下の公式行事後に、広場やパークで繰り広げられる「自由な」散策の名称として残り、ソビエト崩壊後の現在に至っている。

II.

サンクト・ペテルブルク市の外縁部（中心から南西に直線で約4キロ）に位置するエカテリンゴフで開催されたグリヤーニエは、そうしたペテルブルクのグリヤーニエ全体（モスクワも含む）の歴史の上でも、ある意味きわめて特徴的な存在である。

すでに別稿で記したとおり²、エカテリンゴフは18世紀初頭、スエーデンとの海戦勝利（1703年5月）を記念し、ピョートル大帝の妻で、後にロシア初の女帝となるエカテリーナー一世の館・邸宅の場所として誕生した。その後の紆余曲折を経て、エカテリンゴフは19世紀初頭に

¹ その様子は、イーゴリ・ストラヴィンスキイ作バレエ音楽『ペトルーシュカ』（1911年にパリのシャトレ座で初演、振付ミハイル・フォーキン、美術・衣装アレクサンドル・ベヌア）の、特に第一、第三幕に鮮やかに再現され、見ることができる。それは、1840年代、海軍省広場で行われた謝肉祭のグリヤーニエを再現したとされている。特にペテルブルクの革命前のグリヤーニエに関してはA. M. コネチヌイの一連の仕事の参照が不可欠である。彼の仕事の意味については、坂内徳明（2016）。

² 坂内（2017）。エカテリンゴフの歴史については、近年、その全体ならびに個別事象をめぐるいくつかのモノグラフが刊行された（Кормильцева, Сорокина и Кишук (2004) ; Багоревич (2006) ; Ходанович (2011) ; Ходанович (2013)）。そうした動きは、ペテルストロイカとソビエト「崩壊」という時代展開を受けて生まれたエカテリンゴフの敷地と施設の再建が計画されたことと無縁ではない（ただし、再建は中断している）。

は荒廃の観を呈していたが、1820年代半ばに「再生」する。すなわち、1820年代前半、当時のペテルブルク県知事＝軍司令官M. A. ミロラドヴィチの主導の手で再生した。時期は、まさに《プーシキンの時代》— 18世紀初頭にピョートル大帝によって誕生し、帝国の急成長を支えた新興ロシア貴族文化の黄金期 — にあたっていたが、それはそのままグリャーニエ文化の発展期と重なっていた。すなわち、18世紀末から19世紀前半にかけての貴族文化の頂点化と同時に、特に、帝都・都会を中心とする庶民文化の拡張と並行して大衆・娯楽社会が急成長する中で、グリャーニエも大きく展開していった。エカテリンゴフの復活はそうした、19世紀初頭から半ばにかけての都市文化の進展ならびに変容と軌を一にしていたのである。

元来は、ピョートル大帝が自らの妻エカテリーナに与えた郊外別邸（レジデンス、ウサーヂバ³）として生まれたエカテリンゴフだったが、その後、皇族・貴族に継承・所有され、さらに18世紀末～19世紀初頭にはペテルブルク市の所有となり、庶民が祝祭日に自由に散策する娯楽の場となっていった。そうした過程（ちなみに、19世紀末にかけた時期には、名だたるプチロフ工場を中心とする労働者の集まりの拠点となった）は、近代ロシアの帝都におけるグリャーニエの歴史を反映する格好の事例となるのである⁴。

エカテリンゴフのこうした歴史を概観する時、本稿の筆者がもっとも注目するのはグリャーニエが再生する1820年代である。この時期における祝祭の「復活」がロシア帝都社会にとってきわめて大きな「事件」として、社会史・文化史的に重要な意味を持つと考えるからである。そのことの大きな証左は同時代の各種メディアの鋭い反応であり、本稿筆者はそれを「エカテリンゴフ記の誕生」と名付けたことがある⁵。そして、それら「エカテリンゴフ記」の中で特に注目したのが、画家カルル・ガンペリンが残した祝祭の絵巻図である。本稿の趣旨は、この聾啞画家の作品《エカテリンゴフのグリャーニエ》をテキストとして、その描写の全体ならびに細部を検証すること、特にその細部にコメントを付すことにある。

III.

作品を検討する前に、画家について記しておく。ただし、彼の生涯については、特に後半生については不明の部分が多い⁶。

カルル・カルロヴィチ・ガンペリン Карл Карлович Гампельн は1794年にモスクワで生まれた。名前から見てドイツ人にルーツを持つと考えられるが（Karl Hampeln）、祖先等の詳細は不明である。ポーランドで7等文官として働いていた父親は1779年にサンクト・ペテルブルクに上京し、エカテリーナ二世のために、ムラモル（大理石）宮殿用の家具やツァールスコ

³ ピョートル一世から下賜されたことは、ウサーヂバの「起源」と特徴を考える上で重要なファクターとなる（他に、メンシコフ邸宅）。それは、ウサーヂバが「自然発生的な」土地と屋敷ではなく、18世紀以降の、あくまで「上からの」邸宅と敷地整備（入植?）・建築命令の産物であることを示す。

⁴ その歴史概説は、上記した注2にあげた文献を参照。

⁵ 坂内徳明（2017）。

⁶ ロシア革命前の最大規模を誇る人物事典『ロシア・バイオグラフィ事典』（全25巻）には、彼がウィーン美術アカデミー「会員」との記載があるが、これも根拠はない。また、同事典では彼の生年は1808年となっているが、これも間違いである。他に、Милолюбова（2006）；Коростин（1948）。もっとも信頼できる研究成果は Великанова（1984）。彼女は、以下のガンペリン作品の文化史的分析でもほぼ唯一の仕事を残した。ロシア美術館版画部門で働いていたヴェリカノヴァ（1900-1989）に関しては、アレクセーエヴァの論文集のために書かれた回想記を参照 Алексеева（2013）。

エ・セローの個人居室の家具を商う店を構えた。1790年代初頭に一家はモスクワへ居を移し、家具作りの工房のある《白鷺の旗の下で》という名の店を開いたという。しかし、父親は1812年のモスクワ大火後まもなくして死去し、残された妻マリヤとその兄、カルル、妹、弟エゴールからなる一家は経済的には豊かではなかった。

生まれながらの聾啞者だったカルルは幼くしてウィーンに送られ、《マイ校長の聾啞者学校》で教育を受けている。その後、校長の勧めでウィーン美術アカデミーの「生徒」となり、6年間の修学を続けたが、絵画、特に版画を集中的に学んだ。この間、自らの版画作品（おそらく模写）が二度にわたって美術アカデミーから賞を獲得した。もっとも、ウィーン美術アカデミーでガンペリンが受けた美術教育（在学、修了）に関する具体的資料はほとんどなく、ウィーン美術アカデミーで版画を教えていたV. G. キピンゲル（1767-1851）から個人的に教育を受けていたのではないかと、というのがガンペリンの生涯に関する最新の成果を残したC. И. ヴェリカノヴァの見解である。

1815年のウィーン会議の際、ガンペリンは皇帝アレクサンドル一世に謁見し、自作の版画を贈る機会に恵まれた。そのことから皇帝の慈悲によってガンペリンは教育費用を与えられる。また、皇后エリザヴェータ・アレクセーエヴナがウィーン聾啞学校を訪問したこともあって、こうした偶然がその後のガンペリンの運命を大きく変えることとなる。

アカデミーを終えてロシアへ戻ったのは1817年である。6月14日にモスクワへ到着し、一週間後の21日には家族全員でペテルブルクに戻った。カルルは、当時、皇太后だったマリヤ・フョードロヴナ宛のモリス・フォン・デイトリヒシュタイン伯爵からの書簡をウィーンから持ち帰っていた。この書簡を受けたのは、皇太后マリヤの秘書としてマリヤ官房⁷に勤務していたH. M. ロンギノフ（後に、元老院議員、国家評議員、1775-1853）である。彼は、当時、美術アカデミー総裁（在位1817-1843）はじめ多くの役職にあり、国家中枢にいた人物であったA. H. オレーニン⁸に取り次いだ。このこともガンペリンの未来を切り開く重要な契機となった。ガンペリン宛のロンギノフの書簡（1817年7月28日付）には、皇太后が若き画家のことをオレーニンに知らせておくので、オレーニンと面会するように、との指示が書かれているという。さらに、このマリヤの秘書は当時の文部大臣A. H. ゴリツィンにも書簡を送り、ガンペリンを美術アカデミーへ入れることを要請している。この件がオレーニンへ伝わったのは同年8月26日で、その後、関係者間のやり取りがあって、最終的に、ペテルブルクの聾啞者学校の教師として就職が決定したのは10月7日のことである⁹。

美術アカデミー加入とはならなかったが、それでも、全体として短期間にガンペリンの地位と身分が決まったのは、まず何よりも画家の才能が認められたためであり、加えて、オレーニンの全面的な支持と援助があったことがその後のガンペリンの活動を切り開いたことは疑いない。実は、彼の就職が決まる一カ月前の1817年9月、彼と弟エゴールの二人は、母が突然

⁷ Ведомство учреждений императрицы Марии Федоровной

⁸ オレーニンについては、Файбисович (2006) : Приютин (2008)が最新の大きな成果である。さらに、坂内知子 (2012; 2013; 2016)も参照。

⁹ 皇太后マリヤが孤児ならびに障害者とした社会保障に深く関わっていたことは周知のとおり。聾啞者学校開設（1806年、パーヴロフスク。指導者となったのは、かつてウィーン同施設長だったカトリックの聖職者シグムンドである。1810年からペテルブルク市内ヴィボルグ地区へ、さらに1816年にスモリヌイ修道院内、さらに1820年からゴロホヴァヤ通りとモイカ河岸の交差する場所へと移動した。1820年には49名が学んでいたВексеп (2009)。

死去したことの関連で逮捕されている。釈放後、この兄弟を実質的に引き取ったのがオレーニンだった。

オレーニンはペテルブルク市内と郊外プリューチノの二ヶ所にサロンを持っており、ガンペリン兄弟はその寄宿人となっていた。当時、このオレーニンの二ヶ所の邸宅には、当時の多くのインテリゲンツィヤ（文学者、画家、演劇人等）が集まっていたので、ガンペリンはこのオレーニン・サークルの仲間の一人として、これら訪問者たちの多くと親交を結ぶことになった¹⁰。このサークルに仲間入りしていたことが、後に、多くのポートレートを制作する大きな契機となったのである。

ガンペリンがオレーニン家に頻繁に出入りしていたことの成果はそれだけにとどまらない。オレーニンはドイツ留学時代から、広範囲にわたる学術的好奇心から、多くのコレクション（書籍、絵画、考古学的品物等）を所有し、家に満ちあふれていたから、これは、間違いなく、画家に大きな影響を与えたはずである。

ペテルブルクの聾啞者学校での勤務は1824年2月25日までである。この間、1820年代初頭には美術アカデミーの展覧会に、おそらくオレーニンの支援を得て、自らの作品を出品するものの、大きな評判は得られなかった。そうしたガンペリンの才能が認められたのが、本稿で取り上げる《エカテリンゴフのパノラマ》である。版画という性格上、複製部が制作され、しかも、その規模と描写の緻密さからすれば、同時代に広く知られたことは間違いない（販売の公示は1825年8月¹¹）。とはいえ、この作品に対する同時代の反応は、現時点まで発見されているのはあまり多くない。しかし、その一部は皇后エリザヴェータへ献呈されたが（オレーニンのロンギノフ宛1825年5月14日付書簡、5月19、22日の交信¹²）、そこに、同時代人の、この作品に対する、きわめて重要かつ本質的な「理解」が読み取れる点で貴重である。この点に関しては後述する。

その後、ガンペリンはペテルブルク生活になじまなくなる（おそらく、デカブリストたちとの関係を当局が疑うようになったためと考えられる）。1826年以降、彼はモスクワに暮らすことになり、画家としてめざましい活動を行う。その内容は、技法の点で（油絵、鉛筆画、水彩、リトグラフ、ミニアチュール等）、また、ジャンルの点でも（ポートレート、風俗画、カリカチュア）きわめて多彩で多様である。中でも、特に注目すべきは数多くの肖像画を残したことである（M. C. ヴォロンツォフ、C. П. ジハリョフ、A. M. ヴィエリゴルスカヤ、A. H. ヴェルトフスキイ、O. H. タルイジナ、M. И. リムスカヤ＝コルサコヴァ、セルゲイ・リヴォヴィチ・プーシキン、C. X. ムドロヴァ、A. И. ローレル、H. A. コルサコフ、П. П. コノヴニツィン、C. A. ココーシン、B. П. コチュベイ、Д. В. ダヴィドフ、H. Ф. ゴルチャコヴァ、C. Д. リヴォフ、И. В. チェルトコフ、A. A. アンドロー、H. Г. ヴャゼムスキイ公爵の子どもたち、ヂュール一家、等）。これは、上に記したオレーニン・サークルで得た人脈作りの賜物であった。

¹⁰ ただし、ガンペリンの具体的な行動について知られることは少ない。オレーニン所有の郊外屋敷プリューチノでの生活を網羅的に集大成したЛ. Г. Агамарьян Приютино (2008)によれば、ガンペリンはキブレンスキイ、プリュロフ兄弟、ヴァルネクとともにオレーニン家の人々のポートレートを残した人物として名前があがっている他、1829年9月5日の30名を越える客人リストの中に、先述のロンギノフとともに見出される（モスクワから参加?）。彼の弟エゴールは、オレーニン作の芝居「豊かなほど、喜びは大きい」に役者として登場している。

¹¹ Великанова (1984).

¹² Великанова (1984).

その後、ロンドンへ移るが、この間の詳しい消息はまったく不明である。さらに晩年は、若き時代を過ごしたウィーンで暮らし、1880年代に死去したとされる。

IV-1

アクアティント¹³による作品《エカテリゴフのグリャーニエ》は、画家ガンペリンが30歳になろうとする時期に製作され、しかも、知りうる限りでは、彼の本格的な仕事のほぼ最初とも言える出世作＝傑作である。何と言っても注目すべきは規模の大きさだろう。縦幅が9.5 cmであるのにたいして、横の長さは何と10.15 mである。ロシアでは類例がほとんど見られず、日本の絵巻物を思わせる。

緻密な表現力に満ちた作品として、おそらく同時代の反応は大きかったはずであるが、それを示す直接的な資料はあまり多くない。現在まで判明していることは、完成後、ペテルブルク市内のボゼッティ商店で販売されていたこと（1825年8月）、そして一巻が、上述のとおり、皇后エリザヴェータ・アレクセーエヴナへ献呈され、その際の反応が、間接的だが、記されていることである¹⁴。本稿著者は、ペテルブルクのロシア・ナショナル図書館に収蔵された作品（彩色なし）を確認し、分析対象とした¹⁵。

作品の制作年代については問題が残る。というのは、大きな作品であることから、制作が長期間を要したためでもある。描かれた建物の存否を確認した美術史家ヴェリカノヴァの考証、そして、エカテリゴフ史に関する優れたモノグラフを残したO.M.コルミリツェヴァらの指摘に従えば、この作品のスケッチは1824年以前（1820-1823年）に行われていたという¹⁶。しかし、完成段階を1824-1825年とすることに大きな異論はない。1824年5月初めのエカテリゴフのグリャーニエの「復活」を観察し、翌年5月のそれを再度観察し（場合によっては、微修正を加えて）、8月には完成品が販売されたと考えるのが自然だろう。

IV-2

ガンペリンはこの作品を自らパノラマと題しているが、その名付けの理由と意図についての説明はない。その作品の完成から数年後、1830年代に描かれた《ネフスキ大通りのパノラマ》（1830-1835、作者はB. C. サドヴニコフ（水彩）とИ. А. イヴァノフ（絵・リトグラフ）、幅15 cm・長さ16 m）は、大通りの両側、その建物群、歩行者と首都の様子を描写対象とした作品であり、大評判を取った¹⁷。それは、文字通り町の全貌を通りに視点を据えて描いた「パノラマ」の名にふさわしいと言える¹⁸。それに対して、ガンペリン作は通りの片側だけ、具体

¹³ 腐食銅版画の製版技法の一つ、ゴヤの《ロス-カプリチヨス》等が知られる。

¹⁴ 皇后の印象として伝わっているが、端的に言えば、権力中枢からの、祝祭に根源的な「民衆性」ないしは「グロテスク」を直観した「不快さ」の表明である。

¹⁵ Э 1-1, Гир 351, Инв 224031. 他に、エルミタージュ美術館（彩色あり）、パーヴロフスクに収蔵。ヴェリカノヴァによれば、約10点が収蔵されているとするが、場所の詳細は記されていない。なお、本稿で対象とした版画の画像処理の上で福田真梨子さん（放送大学東京多摩学習センター職員）にお世話になった。感謝したい。

¹⁶ Великанова (1984); Кормильцева, Сорокина и Кишук (2004).

¹⁷ ゴーゴリはこの画集を母親へのプレゼントとして購入し、故郷へ送っている（1836年）。

¹⁸ ここで、ロシアにおける「パノラマ」という手法の誕生と展開について述べる余裕はないが、その

的には行列進行方向の右側のみを描いたものである。しかし、この点は《ネフスキイ》のケースとは異なる条件下に理解できる。すなわち、ガンペリン作品の中心的題材は、エカテリンゴフの森と茂みで繰り広げられる祭りの場であり、祭りに向かう行列の沿道よりも、祭りの空間全体の描写こそがメインテーマとなったはずだからである。そのことからすれば、画家にとっての「パノラマ」とは祭りの全体の鳥瞰図の意味だったと理解しておきたい¹⁹。

パノラマ全体は12葉を貼り合わせて構成されるが、大きく見ると、第1～7葉にペテルゴフ大通りに沿って祝祭の場所へ向かう人々の行列、第7～10葉では、エカテリンゴフの森と茂みに繰り広げられる祭りの様子、そして、第10～12葉には、祝祭の場の奥から端へ、さらに川辺までの様子が描かれている。本稿では、紙幅の関係から第6、7葉の祭りの舞台への入場までの部分を検討し、第7葉以降の後半分は続稿で扱う。

第1～7葉に描き出された沿道の様子の魅力は尽きない。混乱しながらも行列の喧騒のただ中を駆ける無数の人々、この祭りに向かう人々を沿道で眺め、興に乗る多数の人々、沿道や祭りの場で思い思いの娯楽に熱中する無数の人々—そのどれもが迫力ある筆致で描かれ（彫られ）てある。沿道の建物から物見遊山に見つめる人々の様子も、そして、多くの動物（ほとんどが犬である）も、さらには、森と茂みに満ち満ちた「狂乱」する様、また、第10葉以降に登場する騎乗の皇帝アレクサンドル一世とニコライ大公（後の皇帝一世）はじめ、多くの皇族や貴族までもが、祝祭の雰囲気をも最高潮に盛り上げている。沿道の綿密な描写を背景としながらも、身分・職業・貴賤の上で実に多様な人々の動的な様子は、このエカテリンゴフ・グリャーニエの祝祭を文字通り再現したものとなり、見る者の目をくぎ付けにするとと言える。

以下、第1葉から順を追って検証してみる。

V-1

第1葉 [以下、小文字はオリジナル資料に対する本稿著者のフィールド・ノート]

建物前に橋の名前・標識、橋の上には人がぎっしり、橋の塔、

橋左端まで有蓋・無蓋の馬車、他に馬上の単身騎手、警備馬上か？

背後に何本ものマスト、帆船も一つ見える、川にボート・はしけ6艘

雲怪しげ？【図1】

(橋のたもとから左側へ)

ここは橋上に比べて人が少ない、それでも手前歩道を急ぎ走る人々、うかれる子供、倒れる者、路上で物売る人、買う人(流行ファッション、男女、傘、服)、左足義足で杖付く人【図2】

馬上単身騎手、馬上警備、いかにも農民の馬車、1、2、6頭立て、馬の中には足を跳ね上げて暴れる者も

後景の家の前に見物人、2階のバルコニーにも見物人【図3】

パノラマはフォンタンカ川に架かる橋の周辺に群れ集まる人々の賑わいから始まる。

幕開けがアレクセイ・ズーボフによる《ネヴァ川のパノラマ》(1716)であり、その後は後継作がなく、1830年代の《ネフスキイ大通りのパノラマ》(1830-1835)まで待たねばならなかった。

¹⁹ 画家のテーマが「沿道」「群衆」をはじめとする細部描写によって「変形」していったこと、それ故に、画家のテーマの理解を再構築する必要があることについては後述する。

橋は馬車や歩きで進む鈴なりにになった群衆で埋め尽くされている。統計によれば、1824年時点のペテルブルクの人口は44万人余、うち女性は三分の一にあたる12万5千人だった²⁰。絵の中では女性の割合が多いと見えるのは、やはり祭りのためだろうか。行列の起点は示されていないが、エカテリンゴフ大通り（現在のリムスキイ＝ルサコフ通り）を人々が進んで来たことは明らかであり、この橋から先がペテルゴフ大通りとなる。

橋は、絵の右端の標示にもあるとおり、1786-1787年に作られたカリンキン橋である。ほぼ同時期にフォンタンカ川に架けられた同一形式の7つの橋の一つであり、いずれも古風でロマンチックな塔が付いているのが特徴である。

パノラマがこの地点から始まっているのは、ここから先が当時の町はずれであることを物語っている。カリンキン橋はフォンタンカ川に架かる橋としては最下流にあり、この橋近くでサドーヴァヤ通りがフォンタンカに突き当たり、エカテリーナ運河に合流している。したがって、この橋は町の最南西端に位置し、フォンタンカも併せて、当時はペテルブルクの市内と市外を区分する境界として機能していた²¹。

橋の下の水面には、全部で6艘ほどの小舟も描かれているが、その進行方向からエカテリンゴフへ向かうことが読み取れる。後景には帆船やそのマストも見える。エカテリーナ運河やフォンタンカから水上ルートで祝祭の場であるエカテリンゴフの船着き場へ向かう手段は、当時としてはしばしば利用されていた²²。

雲の描写は、色が施されていないから、正確には確認できないが、どこか怪しげである。復活したグリャーニエが行われた1824年5月1日は、同日の天気情報によれば、不順だった（朝曇り、時に雪、+1.2度、昼曇り、雪、+3.5度、夜曇り、+2.2度）²³。

橋を渡ってペテルゴフ大通りを進むと、すぐ右側に二軒の家屋が立ち、その前方には里程標が置かれている。二階建の二つの建物は、ヴェリカノヴァの指摘によれば、大勢の人々が身を乗り出す窓の形から、19世紀初頭の街並みに特徴的な建物であるという。家の持ち主は商人のドゥビーニンとエキーモフとされる。看板に「小料理」「ブドウ酒」「果実」などの文字が読めることから²⁴、この地は町はずれとはいえ、このあたりまではまだ商店が軒を並べていたことが分かる。里程標は四分の一露里（1露里は約1キロメートル）を示すもので、少し先には1露里を示すものも描かれている。この里程標は1780年代に木製から石造に代わった。

第2葉

手前の歩道にいる人は、第2葉全部で29人、歩く人、物売り（手、頭上に花）、桶を手で倒れる商人【図4】

全体は塀と屋敷一軒、二階バルコニーと窓から見物人、屋根にも二人坐り、一人はてっぺんに立ち

²⁰ Копанев (1957).

²¹ フォンタンカの「境界性」は、例えば、ドストエフスキイ作『貧しき人々』に読める「気の滅入るほど恐ろしい顔つきをした連中」として列挙される酔払いの百姓、獅子鼻のフィンランド女、労務者、御者、小役人、腕白ども、鍛冶屋職人、復員兵、そして橋の上の物売りの女たちがフォンタンカ川岸通りをうろついている、との記述に示される。

²² フヴォストフに言及あり。

²³ Ходанович (2013).

²⁴ ちなみに、文学作品に町の看板が描写されるのは、都市の造形的フォークロアの一ジャンルとして定着する1830年代のこと。

上がる，堀の前には見物人多数【図5】

太鼓と笛，ロープで犬？を連れた芸人 はやす子供3人【図6】，犬8頭

庶民馬車（芸人乗る）は後部座席なしの二人乗り，中央より右側，馬車がからまり，女性貴婦人救出の光景，足もとに犬，馬車の下に子供が倒れる

第3葉

門のある屋敷，左端にもう一軒の屋敷と門

手前の歩道には物乞い，女性商人が転倒して果物を路上にばらまく【図7】

ヤギ・羊と犬「お見合い」，小麦袋を車で運ぶ，それを2人が後押し

門周囲の混雑，それをかたわらで見つめる，左足義足，杖付く男 犬5頭

通りでは馬車にも混乱あり，やはり転倒して暴走する馬の手綱に引きずられる男

馬車から放り出される男，馬車16

門前はとにかく混乱

ノヴォ・イズマイロフ大通り（現在のオゴロドニコフ大通り）と交差する地点には交番が描かれている。パノラマ全体を通して，祝祭に向かう大勢の人々を沿道で整理・陶製する多数の警官や兵士が登場する。彼らの懸命な努力にもかかわらず，馬車が業者もろとも転倒し，車輪が外れたり，馬が後ろ足で立ち，騎手が放り出されたり，人々がパニックを起こして走り出す場面も多く描かれる。こうした「混乱ぶり」は当時の定期刊行物の記事でも散見できるし，1824年5月のエカテリンゴフ「再生」を祝って作られた詩人D.フヴォストフの頌詩にも記されている²⁵。

第4葉

橋上は大混乱，傘が空中へ，欄干から落ちかける者，警備兵も飛び上がる【図8】

屋敷，門の背後に一軒，隣に屋根の崩れた一軒，25露里・里程標【図9】

歩道の描き方に変化，歩道に芸人，人形芝居か？ トライアングルと太鼓，上には人形？

両足・膝を地につけて這う者，足なく両手だけで進む者

馬車9，庶民用3，うち一つは転倒

第5葉

屋敷，林，歩道に物売り，果物や花 馬車は転倒 車輪がはずれ，業者，客が完全に放り出され，乗る台が全面を見せる【図10】，馬車11，その1つは乗り合いか？

第6葉

ナルヴァ門周囲はさほど混乱なし，馬車，歩行者とも整然と門をくぐる【図11】

門から先は歩道の別なし

門の左では商品の果物と花が散乱，杖を付く聖職者2名

警備兵が小休止，木下で馬も人も，客人の馬車を護衛する人々，犬

沿道の「混乱」はさらに続く²⁶。目前に関所があり，そこをくぐるといよいよ祭りの空間が

²⁵ 坂内徳明（2017）。

²⁶ ソビエト期の優れた美術史家であるコメロヴァは，ガンペリンの作品を論じる中で，路上の「混乱」を示す「ある同時代人の描写」として，フヴォストフの頌詩（1824）の個所を引用するが，その典拠

始まることを予感して、沿道を進む人々の高揚感が頂点に達するためだろうか。

ノヴォ・イズマイロフ大通りを過ぎると二階家と庭園が目に入る。これは、18世紀末に建てられた、1820年代初めにはドイツ人パン屋ヘンツの所有の家である。手工業者を中心としたドイツ人の帝都移住は、町の創建以来行われた。ガンペリンの時代からしばらく後になるが、1869年に実施された第一回全国調査によれば、市内に住むドイツ人の数は46000人で、全人口の7パーセントにあたり、民族別ではロシア人に次ぎ第二位である²⁷。

道はペソーチナヤ通りを横切り、サルティコフ將軍の屋敷と大庭園を過ぎると、オブヴォド運河にぶつかる。運河の名称であるオブヴォドは「周辺」「縁」「外濠」の意味であることから、当時、ここは町の境界であり、はずれだった。橋の手前には旧ナルヴァ門が聳えていたが²⁸、これはナルヴァの関と呼ばれていたことから、この場所が市内と市外を行政的に区分けする文字通りの関門所となっていた。関を越え、運河を越えると、そこから先はとたんに家屋もめっきり少なくなり、ごく少数の別邸や庭を見るだけとなる。

パノラマで特に目を引くのは、道行く人々や馬車のダイナミックな動きと沿道の賑わいである。馬車の型や人々の服装は、絵全体からすれば素描的であるとしても、どれも実に雑多で、かつリアルであり、習俗史=誌の貴重なテキストとなる。杖を付きながら進む片足の軍人は、祭りから10数年以前のナポレオン戦争時の傷痍兵だろう。何人もの乞食や朱儒、大道芸人が描かれ、路傍で商品を広げる大道商人も至る所に登場し、聖職者も沿道を進む。彼らの姿は、祝祭の舞台である森では、圧倒的多数の群衆の間に消えてしまうのを恐れるかのように、画家は祭りへ向かう沿道の中にしっかりと書き込んだのだろう。

第7葉

橋上の大混乱 落ちかけて欄干にころうじてしがみつく、馬車2台が突破
手前に傘をすぼめて地面に置き、靴下を直す女性、左端には水汲みか？【図12】
左半分は橋を渡った先、いよいよお祭りの場・グリャーニエへ、
中央広場は、背後に各種施設・建物、手前で馬車を乗りまわす人々

運河を越えて、商人ツイルコヴァ、マルイシェフらの屋敷、そして「ペテルゴフから25露里」と記された里程標を見ながら、上述の凱旋門をくぐる。ナルヴァ広場に出て、右折すると、タラカノフカ川とそれに架かるストイギン橋を渡る。いよいよエカテリンゴフに到着する。すでに祭りはたけなわである。（この稿続く）

参考文献

- Алексеева М. Л. (2013) Из истории русской гравюры XIII-начала XIX в. М.-СПб.
Баторевич Н. И. (2006) Екатеринбург. История дворцово-паркового ансамбля. СПб.
Векслер А. Ф. (2009) Училище глухонемых // Три века Санкт-Петербурга в трех томах. Т. 2.

を示していないが、ソビエト期のフヴォストフ評価を物語る証拠の一例。

²⁷ Юхнева (1984).

²⁸ 旧ナルヴァ門と記したのには理由がある。市内入口としての関所は1830年代になって、さらに南のナルヴァ広場（現在のストライキ広場）の手前に移された。もともとそこには、建築家クヴァレンギによりナポレオン戦争の勝利を記念して建てられた門があり、これが1827年に旧ナルヴァ門とともに解体されて新ナルヴァ門となって現在に至る。

Деятнадцатый век. Кн. 7. СПб.

- Великанова С. И. (1982) Гравюра К.Гампельна «Екатерингофское гулянье 1-го мая» как источник для изучения архитектуры и быта Петербурга 1820-х годов // Старый Петербург. Л.
- Великанова С. И. (1984) Новые факты творческой биографии К. К. Гампельна // Русская графика XVIII- первой половины XIX века : Новые материалы, Сб. ст. под ред. Е. И. Гаврилова. Л.
- Гампельн, Карл (1914) Русский биографический словарь в 25 томах (1896-1918). Т. 4. СПб.-М.
- Горбатенко С. Б. (2002) Петергофская дорога. СПб.
- Горбатенко С. Б. (2003) Новый Амстердам. СПб.
- Зуев Г. И. (2004) Нарвская застава. На перепутье трех веков. М.
- Комерова Г. Н. (1961) Сцены русской народной жизни конца XVIII-начала XIX века. Л.
- Конечный А. М. (1985) Петербургские народные гулянья и развлечения. Конец XVIII-начало XX в. // Советская этнография. No.4.
- Копанев А. И. (1957) Население Петербурга в первой половине XIX века. М.-Л.
- Кормильцева О. М. (1981) Парк имени 30-летия ВЛКСМ // Сады и парки Ленинграда. Сост. В. П. Иванова. Л.
- Кормильцева О. М. Сорокина П.Е. Кишук А. А. (2004) Екатерингоф. СПб.
- Коростин А. Ф. (1948) Начало литографии в России. М.
- Котельникова И. Г. (1974) Предисловие. Панорама Невского проспекта В. С. Садовникова. Альбом. Л.
- Миролюбова Г. А. (2006) Русская литография. 1810-е -1890-е годы. Очерки истории, мастера, печатные центры, издательства. М.
- Панорама Невского проспекта (2003) Литографии, выполненные И. А. Ивановым и П. С. Ивановым по акварелям В. С. Садовникова в 1830-1835 годах. СПб.
- Подробный план СПб (1828) Подробный план столичного города С. Петербурга 1828 года ген.-майора Щуберга. СПб.
- Приютино (2008) Приютино. Антология русской усадьбы. СПб.
- Сады и парки СПб. (2004) М.-СПб.
- Файбисович В. М. (2006) Алексей Николаевич Оленин. СПб.
- Федоров Б. (1824) Гулянье в Екатерингофе // Отечественные записки. Ч. 18. No. 49.
- Ходанович В. И. (2011) Очерки истории Екатерингофа. XIX-первая половина XX века. Монография. СПб.
- Ходанович В. И. (2013) Екатерингоф. От императорской резиденции до рабочей окраины. М.
- Чеканова О. А. (2004) Екатерингоф // Санкт-Петербург. Энциклопедия. СПб.
- Цылов Н. (1849) Атлас тринадцати частей С-Петербурга. СПб.
- Юхнева Н. В. (1984) Этнический состав и этносоциальная структура населения Петербурга. Л.
- 坂内徳明 (2016) 「革命前ベテルブルク文化史研究の一スタンス —— А. М. Коначескогоの仕事」『近代ロシア文学創成の環境 —— 貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化的・社会的ランドシャフト』（平成 25～27 年度・日本学術振興会・科学研究費助成事業・研究成果報告書, 研究代表者 坂内徳明）

- 坂内徳明（2017） 「エカテリンゴフ園遊頌詩論考 —— D. フヴォストフの詩（1824）に対するコメンタリイを通して」『放送大学研究年報』第35号
- 坂内知子（2012） 「ロシア貴族とウサーヂバ —— A・オレーニンと別邸プリューチノ（1）」『人文・自然研究 第6号』（一橋大学）
- 坂内知子（2013） 「ロシア貴族とウサーヂバ —— A・オレーニンと別邸プリューチノ（2）」『人文・自然研究 第7号』（一橋大学）
- 坂内知子（2016） 「ロシア貴族とウサーヂバ —— A・オレーニンと別邸プリューチノ（3）」『近代ロシア文学創成の環境 —— 貴族屋敷（ウサーヂバ）の文化的・社会的ランドシャフト』（平成25～27年度・日本学術振興会・科学研究費助成事業・研究成果報告書, 研究代表者 坂内徳明）

<https://ru.m.wikipedia.org/wiki/Гампельн>

https://ru.wikipedia.org/w/index.php?title=Гампельн_Карл&oldid=87452836

（一橋大学名誉教授）

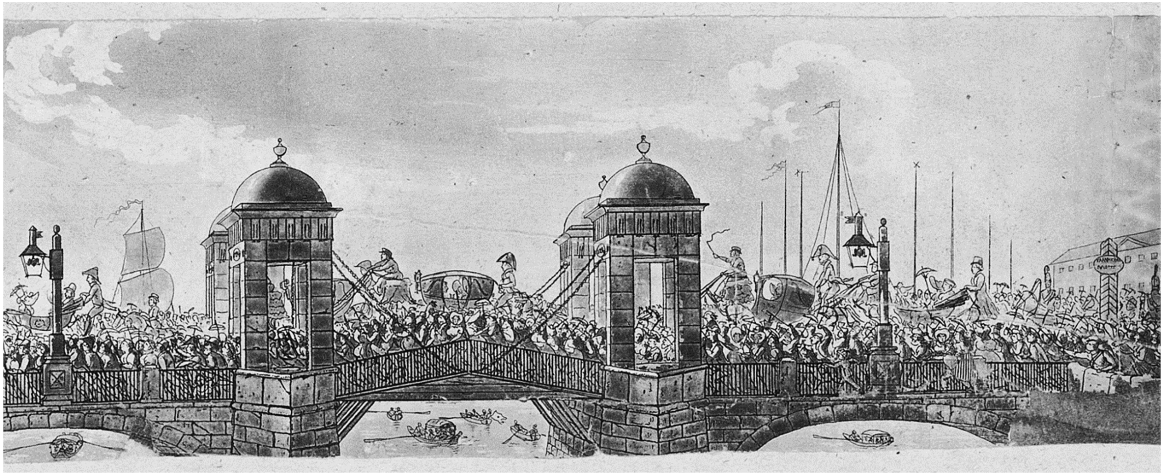


图 1



图 2



图 3



图 4

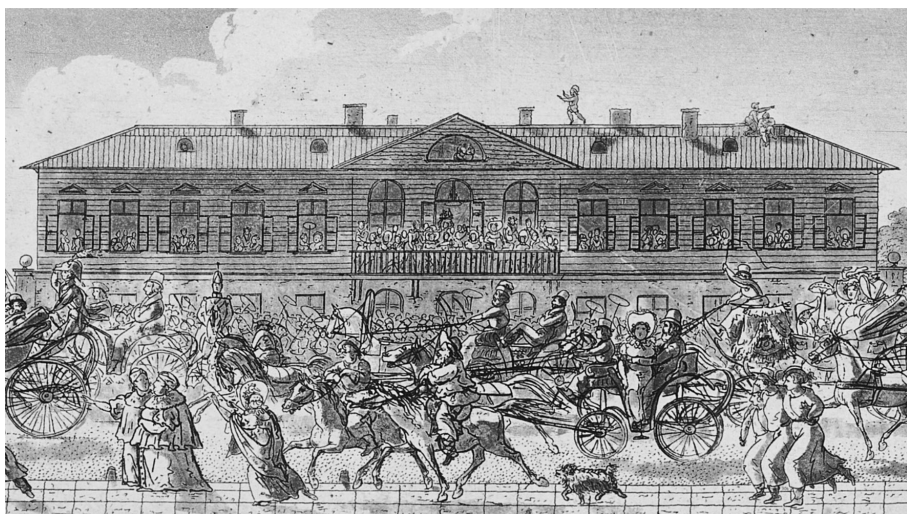


图 5

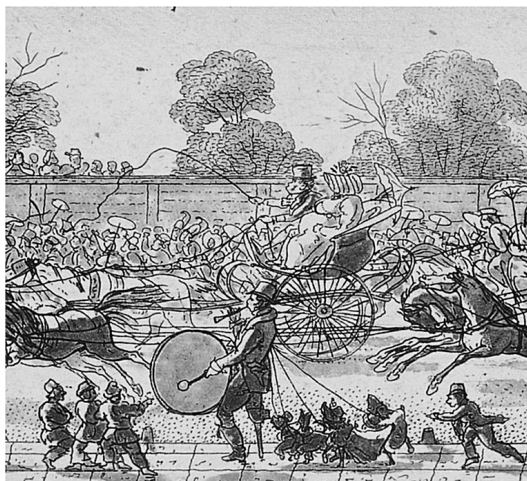


图 6

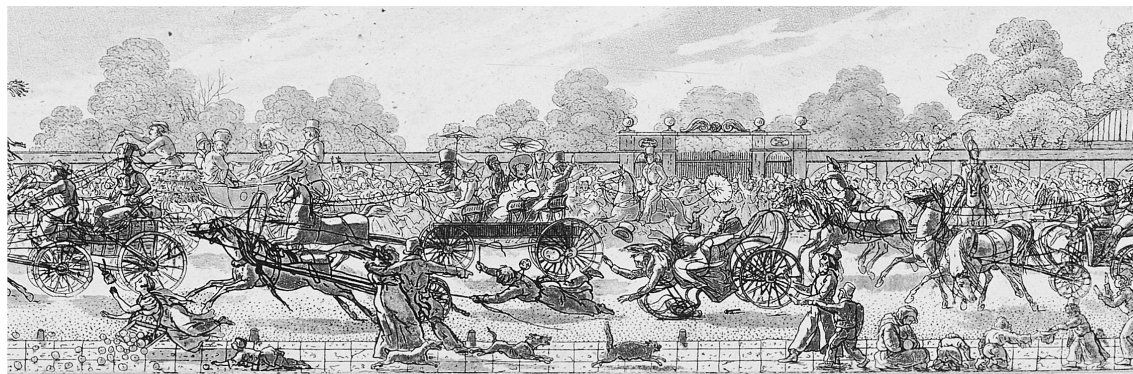


图 7

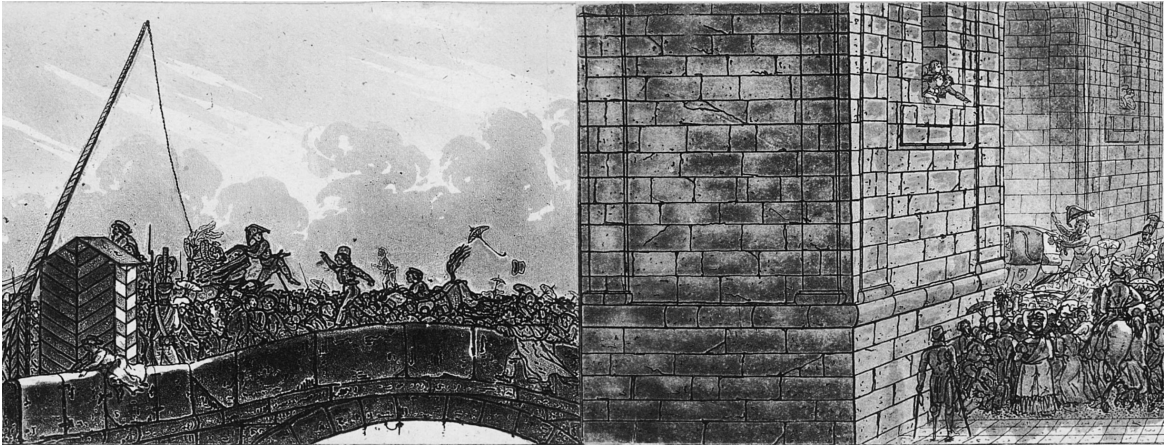


图 8



图 9

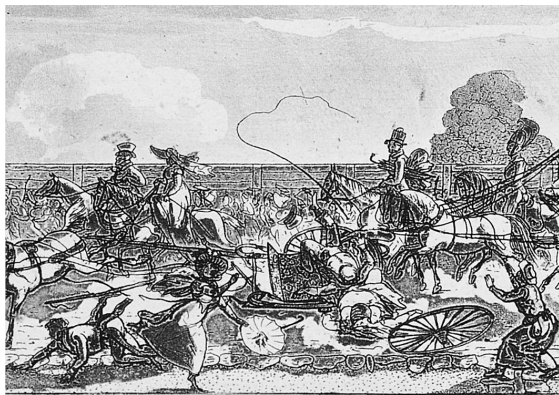


图 10

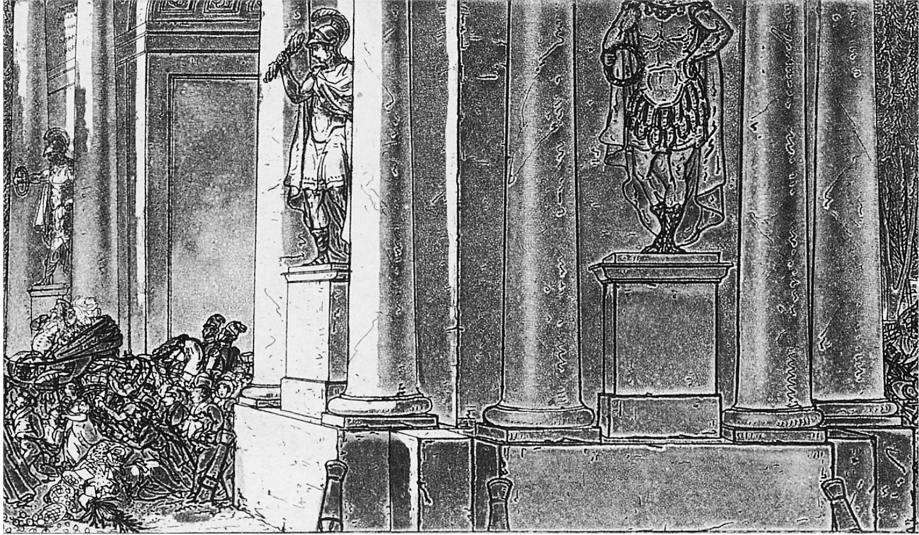


图 11

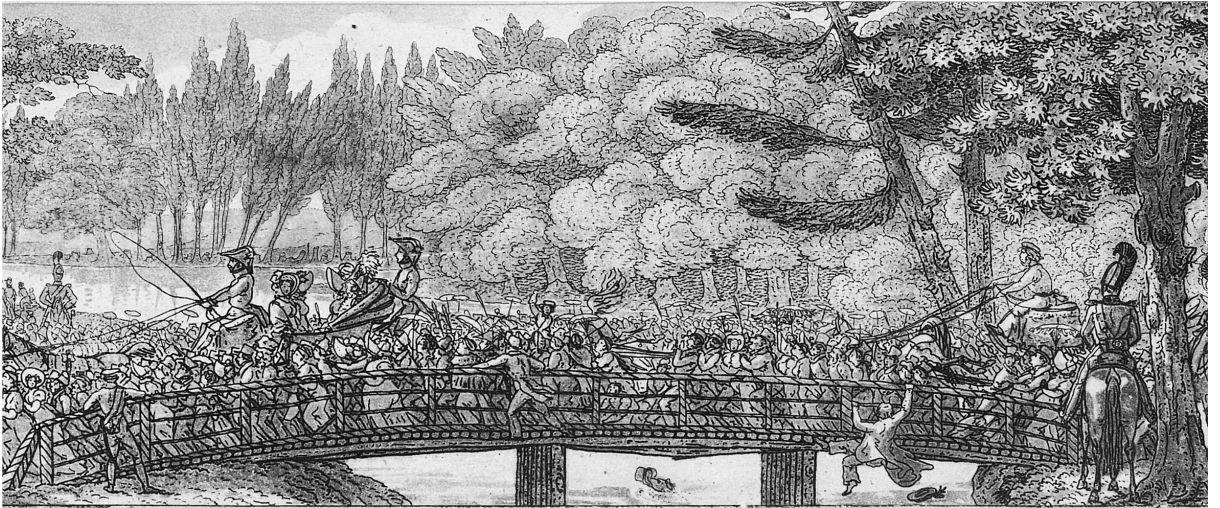


图 12